

様々な植栽管理や造園工事を幅広く手掛ける 一般住宅から店舗、施設、公共事業まで

3年前に個人事業として創業し、2021年5月に法人成りした造園会社「和苑」。公共から民間まで、造園や緑化工事、庭園、緑地開発など幅広い工事を手掛けており、順調に業績を伸ばしている。同社の横山社長と神成専務はもともと同じ職場で師弟関係にあり、専務が師匠、社長が弟子だったという。その中で築いてきた強い絆は今も健在だ。本日は俳優の小倉一郎氏が同社を訪ね、社長と専務にインタビューを行った。



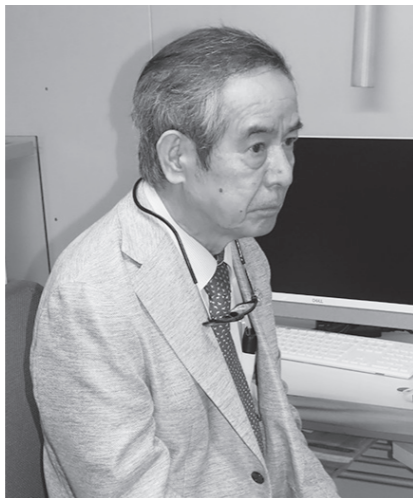
—まずは横山社長と神成専務の歩みからお聞かせください。

(横) 東京都多摩市の出身で、高校卒業後は八王子にある造園会社に就職しました。たまたまハローワークで求人を見かけて、日本庭園ってどうやって作るんだろうと興味を持ったことが現在の業界へ入ったきっかけです。昔から自然が好きでしたし、始めてみると奥が深く、どんどん夢中になっていきましたね。

(神) 私は羽村市の出身です。19歳から地元の植木屋で働くようになりました。当時は知識もそれほどありませんでしたが、やっているうちに段々と楽しくなり、自分に合っていると感じるようになったんです。同業3社で経験を積み、その中で社長と出会いました。

—社長と専務は、もともと同じ会社でお勤めされていたと？

(横) はい。私が勤めていた会社に、専務が入社してきたんです。当時、私はまだ10代の見習いで、専務は私よりも7



歳上の大先輩でした。

(神) 社長の他にも若い子が何人かいましたが、その中でも社長が一番見どころがあり、人の上に立てる人間だと感じました。それで、自分の手で育ててみたいと。当時、私は26歳ぐらいで、社長は18～19歳。社長が今の自分と同じ年齢になるまでには、自分が教わってきた全てを教えると言いき、そこからは毎日付きっきりでした。

—当時は、昔の徒弟制度のような感じだったのでしょうか。

(横) そうですね。現場でも一緒、飲みに行くのも一緒。専務は厳しいけれど愛がある人で、私のことを考えて指導してくれていると伝わってきました。

—その中で信頼関係を築いてこれたのですか。独立には何かきっかけがありましたか？

(横) 当時、自分は人の上に立つよりも縁の下のような存在が向いていると思っていたので、ずっと専務に会社を立ち上げてほしいと言っていたんです。専務は辛口ですが人に好かれるタイプですし、リーダーシップもありますからね。自分は支える立場として一緒に

小倉 一郎 (俳優)

「従業員さんは横山社長が引っ張ってきた人が中心のようで、チームワークの良さが感じられました。そうした中で神成専務が指導を担当されているとのことで、お二人がしっかりと連携、役割分担されていて、最高のパートナーなんだと感じましたね。勢いのある会社ですから、今後の成長にますます期待が膨らみます！」

やっていきたいと思っていたのですが、専務は会社を辞めてしまったんです。—退社されて、他の会社に移られたということでしょうか。

(神) はい。会社側と経営方針に関して少し食い違いがありまして、先輩の会社に移ることにしたんです。社長と一緒に仕事をしたのは4年間ほどでしたが、もう私にできることはやりきったと感じていましたし、後は自分で場数を踏んで技術を磨いてほしいと思っていました。実は、辞めるという話もしていなかったんですよ。

—社長にしてみれば、少し寂しい気持ちもおありだったでしょう。その後もお付き合いは続いていたのですか。

(横) はい。そこからしばらくして、家庭の事情もあって独立することを決め、個人事業を立ち上げたのが3年前、24～25歳の時でした。2年目からは専務にも参加してもらい、昨年5月に法人化して、今に至っています。

—ステージを変え、新たなスタートを切られたのですか。立ち上げ当初はいかがでしたか。

(横) 知り合いの会社に挨拶に行き、請負いではなく手伝いとして呼んでもらうところからのスタートで、1年ほどはそうして基盤を築いてきました。専務を会社に呼んだのは、法人化の見通しがついてからで、彼が加わったことでさらに大きく前進したと感じています。

—やはり社長にとって専務の存在は大きいのでしょうか。現在はどんなお仕事が多いのでしょうか。

(横) 道路の樹木管理など、公共の仕事がメインですね。他には商業施設や学校など教育施設の樹木管理、一般住宅や店舗のお庭の剪定作業など幅広く手掛けて



専務取締役 神成 裕樹

います。コロナの影響も多少はありますが、木や草を放っておくと景観が悪くなるだけでなく、道路の樹木ですと安全にも影響しますからね。手入れは必ずやらないといけないものなので、そういう意味では景気などの影響も受けにくく、公共の仕事も安定しているのありがたいです。現在、従業員の数は私たちを入れて7名。お客様や地域の方に満足を提供することはもちろん、従業員も心身ともに健全でいられるよう、福利厚生にも力を入れています。

—同業者さんも多いと思いますが、その中で御社の強みとおっしゃいますか？
(横) 勢いならどこにも負けません。機動力もありますし、従業員一人ひとりの



代表取締役 横山 篤寛

気持ちが強いですね。
(神) 外仕事を中心ですから雨の日などは大変ですが、ここでは誰も文句を言いませんし、皆若いのに真摯に仕事に取り組んでいます。技術はもちろん、人間的にも自慢できる人ばかりです。

—お二人が仕事や地域に対し、誠実に向き合ってきたからこそですよ。最後にこれからの夢を。

(横) 人を増やし、現場を増やして任せていき、私は庭づくりに専念できれば嬉しいですね。

(神) ここまで順調にきましたが、過信することなく、現状維持をしながら少しずつ拡大していけたらと思います。

(2022年4月取材)

▶▶▶ 信頼と阿吽の呼吸で事業を牽引

▼「独立にあたっては事前に横山社長から相談があり、一緒にやりたいと誘われたのですが、その時は断ったんです」と神成専務。その理由は、「個人事業」ということ。専務としては当然応援したいという気持ちもあったが、逆に可愛がってきた弟子だからこそ「私に頼らず頑張してほしい」、「甘やかしたくない」という気持ちがあったのだという。ただ社長としては、どうしても専務の力を借りたいという思いがあった。「そこで、1年間自分一人で踏ん張って基盤を築き、来年には株式にできるという見通しがついてから、もう一度専務にお願いしたんです」と社長。その頑張りも耳に入っていたという専務は法人化の予定と条件を聞き、入社を決めたそうだ。▼ももとは師弟関係だったが、今は肩書きとしては逆転している。愛のある指導で仕事の楽しさや厳しさ、やり甲斐を

伝え続けてきたかつての時間が、二人を新たなステージへと導いたのだろう。現在は、社長のサポートをしながら、従業員の指導にも大きく貢献しているという専務。「社長は人知れず努力し、新規開拓も進めています。今後も社長に先頭を走ってもらい、私がお二人の間を縫うように動いていきたい」。長年培ってきた信頼関係と阿吽の呼吸が、企業としても大きな強みとなっている。

